

# 自治大卒業生の声

## 自治大卒業生（第1部・第2部特別課程第50期）

愛媛県松山市 健康医療部 生活衛生課 林 紗代

編集者注：本稿は、自治大卒業生における研修の特長などについて、自治大卒業生が記したものです。

### 1. はじめに

令和8年1月30日から2月27日までの約1か月間、北は北海道、南は沖縄まで、全国各地から集まった総勢74名の女性職員のみで構成された本研修は、私の想像を遥かに超える学びと気づきを得る、人生観をも変える貴重な経験となった。入校前日の1月29日、自治大の正門で一礼し、希望と不安が入り交じる中で門をくぐった日の緊張感は、今でも鮮明に記憶に残っている。

近年、職場における女性職員は増加しており、部下の育成や業務成果の向上という観点からも、女性管理職のマネジメント能力の向上が重要となっている。私は、全国の優秀な職員と切磋琢磨し、そこで築くネットワークを活かすことで、松山市の女性管理職の資質向上の一翼を担いたいという強い決意を持って講義に臨んだ。

### 2. 事前課題及び事前準備について

入校決定後、通常業務と平行しながら準備を進める必要があり、事前課題の一つである約50時間に及ぶeラーニングは、想像以上に負担も大きく、計画的な学習が求められた。また、担当外の業務についても所属自治体の現状を精査し、担当部署へヒアリングを行う過程で、多面的な視点から行政課題を捉える力を養うことができた。この準備プロセスそのものが、問題発見・解決能力の向上に直結したと感じている。

### 3. 研修内容の深化

研修は、講義と演習で構成され、約90

コマ（1コマ70分）に及ぶ講義では、各分野の第一線で活躍されている講師陣から、地方自治の本質や最新の知見を学ぶことができた。演習では、以下の3つの形式で実践的なスキルを磨いた。

#### ① テキスト型事例演習

各自治体が直面する行政課題を持ち寄り、先進事例を題材に取るべき解決策を討議し、報告書としてまとめた。

#### ② ディベート型演習

設定された論題に対し、肯定側と否定側のグループに分かれて討論を行った。個々の長所を活かした役割分担を行い、必要な資料を収集し理論を組み立て、より良い政策立案を行うことは、限られた時間の中で、意見集約力を養う絶好の機会となった。

#### ③ 特定政策課題レポート

いわば、卒論のような本講座の集大成ともいえるものであり、複数のテーマの中から選択し、所属自治体の部局長に対する提言を念頭に作成するレポートである。私は、「女性活躍推進」をテーマに、「男女ともにハタ（傍）をラク（楽）にする女性活躍推進について」をテーマに作成した。全国的な動向と自治体固有の事情を整理し、実効性のある政策提言を検討する中で、何度も推敲を重ね、時には夜明けまで机に向かうこともあった。提出時の解放感と達成感は筆舌に尽くしがたいものであった。

### 4. 全寮制の共同生活が生んだ「絆」

全寮制の醍醐味は、講義以外の時間にあった。連日、各地から届く銘酒や特産品を囲む時間は、さながら「全国うまいもの市」のようであった。談話室に自然

と集まり、日々追われる課題や日常の喧騒から離れて業務上の悩みやキャリアについて、さらには私生活に至るまで素直に語り合う中で、互いの価値観を尊重し合う関係性が築かれた。長年の知己であるかのような信頼関係が生まれ、ざっくばらんに話せることを心地よくも感じた。

また、地元や職場を離れることで客観的に見つめ直す機会となり、改めて地域や職場の良さを再認識するきっかけにもなった。

## 5. 「子育て・親育ち・共育」への想い

私は、若くして子育てを終え、現在は介護の真っ只中にある。母や今は亡き父の支えに感謝しつつ、振り返れば子どもから教えられることもたくさんあり、子育ては「子育て・親育ち」であったことを痛感した。また、教え育てる「教育」ではなく、共に育つ「共育」を目指して、二人の子どもと刺激し合いながら仕事・子育て・学びの「三立」を意識してきた。

研修生の中には、週末ごとに遠方の自宅へ戻り、育児と家事に奮闘する仲間もいた。その姿に、子育て等を理由にキャリアアップを躊躇することのないよう、職員一人一人の状況に寄り添いながら、性別にかかわらず中長期的な成長機会を確保していくことが、女性活躍推進を実効性のあるものとするために不可欠であると感じた。今後は、日々の業務や周囲との関わり方を通じて、「この人と一緒に働きたい」と思われる職員を目指し、組織全体の職場風土の向上に繋げたい。

## 6. 感謝

本研修に参加することを、快く送り出してくれた職場の上司や同僚、日々の課程運営を支えてくださった教務部の方々、日々の生活を支えてくれた家族、

そして出会ってくれた「サイコー」の73名の仲間たちに心から感謝を申し上げる。1か月間とは思えない濃厚な日々を過ごすことができ、働く場所は違えども、それぞれの地で奮闘する仲間の存在は刺激となり、次へと繋がる大きな活力となっている。

## 7. おわりに

自治大学校での経験は、言葉では言い尽くせないほど得るものが多く、自分にとっての立派な「財産」となった。ぜひ、多くの女性職員に本研修を実際に体感してもらいたい。このような人材育成環境の中で、キャリアを見つめ直し、志を同じくする仲間との出会いは、他の何物にも代えがたい、かけがえのない時間となり、「人脈は最大の資産」であることを実感できるはずである。

研修が終わりに近づくにつれ、できることなら、一分でも一秒でも長く、この仲間たちと学んでいたいと思えば思うほど、自然に涙が溢れ出た。

退寮の日、自治大学校を後にする際、大学へ向かい深々と一礼し、自治大学校の門を出た。その姿は仲間にも広がった。仲間はなかなか頭を上げることをせず、その姿をみて感慨深いものがあつた。次に再会した時には、一回りも二回りも成長した姿を見せられるよう、今後も研鑽を重ね、成長し続ける公務員でありたいと切に願う。



～麗沢寮5階フロアの仲間と卒業証書を手に～